C A S

News Letter

Center for Asian Studies, Kanagawa University
神奈川大学アジア研究センター

No.3 June, 2015

Contents

スタンフォードでの在外研究を終えて　佐橋　亮 …… 1
《出張報告》
「水俣を訪れて」　東郷　佳朗 …… 4
「世界が賞賛した熊本の地下水源地を訪ねて」　佐藤　寛 …… 5
《研究会報告》
「上海の『敵国人集団生活所』をめぐる物語
—アメリカ国立公文書館（NARA）の資料」　孫　安石 …… 7
2014 年度活動報告 …… 8

スタンフォードでの在外研究を終えて

佐橋　亮

2014年4月より1年間、在外研究員としてスタンフォード大学（アメリカ・カリフォルニア州）にて研究生活を送った。これまでも幾度かの留学を経験してきたが、スタンフォードでの日々は学問の素晴らしさを再認識させてくれるものだった。

もう一つの教室

スタンフォードには政治学や社会学、経済学といった学科に加え、フリーマン・スポングリ国際関係研究所（FSI）、フーバー研究所、東アジア研究所といった研究機関が付設されている。FSIはコアとなる教員だけで50数名、関係教員や客員教員、フェローを入れると数百名の規模を有する一大研究機関となっている。筆者の所属したアジア太平洋研究センターに加え、民主主義と法の支配、国際安全保障など6つのセンターが傘下に入っており、それぞれのセンターはいくつものプログラムに別れて活動している。アジア太平洋研究センターも、日本、韓国、中国、東南アジア、医療政策に別れている。これらの研究所や学科、ビジネススクール、ロースクールなどで毎日ランチタイムと夕方を中心にいくつものシンポジウムや講演会が催されている。

話されている内容は様々だ。フランシス・フクヤマから、民主主義の将来やアメリカ政治の機能不全について、まさに今世界中が注目している彼の議論を聞くこともできる。カール・アイケンベリーから、陸軍中将から駐在大使へと転じながら長年アフガニスタンで活動してきた国際政治の現場感覚を指南してもらうこともできる。FSIと政治学科は同じエンシナ・ホールという建物にあり、他の研究所も距離的に近い。5分も歩けば最先端の話が毎日でも聞ける。

キャンパスを訪れる人々も、本当に多様だった。リービ英雄（小説家）、イ・ヒョンソ（脱北者、人権活動家であり、TEDスピーチで世界的に有名）、ナヤン・チャンダ（歴史家）といった人々は、スタンフォードという場で話すことに少し緊張しながらも、考え抜かれた内容を話してくれた。スチュアート・カニンはポツダム会談（1945年）においてトルーマン、スターリン、チャーチルといった首脳を前に、19才の若き軍人としてバイオリンを弾いた。のちにサンフランシスコ交響楽団でコンサートマスターを務めた彼を囲み、音楽演奏とパネル討論（陪席するのは従軍経験のあるシュルツ元国務長官）を組み合わ

アジア太平洋研究センターでのシンポジウムにて。
左：筆者，右：ダニエル・シュナイダー副所長

スタンフォード大学のシンボルといわれる，フーバータワー

せて当時を振り返るイベントもあった。

連続シリーズもよく行われている。たとえば大国化する中国が抱える課題、アメリカの政治外交などについて、5回から10回程度まとまって話を聞くことができる。スピーカーは東海岸や中西部の名門大学、ワシントンやカリフォルニア政界から集められている。やみくもに人が集められているのではなく、しっかりとしたテーマ設定を先に行った上で、最適のスピーカーが選ばれていると感じた。

あたかも世界最先端の議論のシャワーを毎日受けているようだった。もちろん教室では学部生や院生相手に多くの講義が展開されている。しかしスタンフォードには「もう一つの教室」が存在しているのだと感じていた。

緊張感に溢れるセミナー

筆者は国際政治を専門にしているため、これまでワシントンやブリュッセル、キャンベラに滞在し、セミナーやシンポジウムが日々開催されている場所に身を置いてきた。東京でも毎日、色々なイベントがある。しかしスタンフォードはひと味違う。やはりどこまでもアカデミックだった。

たとえば、いわゆる実務家として外交官や軍人が講演にやってくることがある。どの国でも良いのだが、(たとえば領土問題や貿易交渉などに関して)政府としての立場だけを解説するようなプレゼンテーションをしたとしよう。ワシントンなどではよくある話なので、参加者は話半分に聞きながらスマートフォンでもいじっている。質問も相手に配慮した質問か、逆に仲の悪い国の人から辛辣なコメントが来る感じだ。

しかし、スタンフォードではそうはいかない。会場からは続々と、問題を解決するためにはどういう知恵があるのか、今後どのように展開する可能性があり、どのようなファクターが効いてくるのか、講演者がたじろぐほどの質問が飛び交う。

たしかにつまらないセミナーも面白いものと同じようにそれなりにあった。しかしここは学問の場所。貴重な時間を何も得ないで帰るわけにはいかない。そもそも家族との時間や自分の余暇の時間を大切にするために、時間に敏感な人が多かった。「あなたは何か面白いことを言ってくれるの？」自分の研究に役立てよう、アイディアを得ようとする参加者にあふれていた。

モデレーターの技術が高いことを前提に、何人かの講演者からなるパネルの場合、思いつく限りの論点を網羅するように事前の準備が徹底されていた。必ずしも悪いことではないのだが聴衆の質問は方々に散ることが多い。他方で3,4人のスピーカーに好きなように話させても話はまとまらない。冒頭にしっかりと議論の方向性を示し、その後も議論を導くモデレーターの技術。日本では「あの人は司会が上手いよね」といわれることもあっても、その技術の善し悪しで選ばれているとは言えない。しかし、イベントの知的生産を高めるためには、しっかりとした技術を会得したモデレーターが必要ということも痛感した。

その一方で、聴衆のレベルが高いことを前提にした、純粋に学術的なワークショップでは、プレゼンの途中でもどんどんと質問、コメントが矢のように飛ぶ。ボクシングのように続く「60分一本勝負」に、その分野の第一人者、若手教員、博士課程の学生が全員真剣勝負の気迫を持って参加している。発表者は自分のアイディアと方法論を明確に

したうえで、余計なものを徹底的にそぎ落として議論を持ってくる。発表する側もコメントをもらうために必死。聞いている側も時間を無駄にしないために必死。その緊張感のなかから新しいアイディアが産まれている。

一年間の学びを通して

スタンフォードの日々は、研究の楽しさ、喜びを日々与えてくれるものだった。突き抜けるように青い空のもと、自宅から30分も歩くと研究所に着く。毎日何かしらのイベントや講義に出るようにしていたが、それ以外の時間は自室で過ごした。極めて整備されたデータベースと蔵書はあっという間に必要な論文や文献にアクセスさせてくれた。アイディアが思い浮かばないときや難解な論文に疲れたときは、緑に溢れたキャンパスを散歩した。ふと思いついたアイディアを木陰のベンチで慌ててメモに落とすことが常だった。

どこまで役に立ったのかは定かではないが、筆者もスタンフォードのシンポジウムで2回、学部・修士課程の講義で1回話をする機会に恵まれた。日本の安全保障政策の変化と国内政治の連関、アジア太平洋における地域制度や同盟の変容といった内容を扱ったが、これらのテーマへの関心が高まっていることを肌で感じた。学生が主催するイベントで、北京大学とテレビ中継をしながら両大学の学生に話す機会もあった。

こういった機会や日々の議論の中で、すべてを説明しようとするのではなく、自らの主張のオリジナリティを明確にし、それを立証するために手際よく話す習慣が身についたと感じる。

学問には完全な静寂のなかで思索にふける時間と、同僚との闊達な議論のなかで議論を磨くことの双方が不可欠だ。同世代の政治学者フィリップ・リプシー、櫛田健児、同僚のマイケル・アマーコスト、トマス・フィンガー、ダニエル・シュナイダー、李成賢との議論から、自分一人では思いつかない新しい着想を得ることができた。また、青木昌彦、星岳雄、森口千晶といった同じプログラムに所属する経済学者との議論も在外生活でなければ得られなかった。

博士課程を修了してから約7年経ち、「壁」を破りたいと思っていた私にとって、すべての機会が学問を広く捉え直すための最高の再教育になった。快く送り出してくれた法学部、また神奈川大学の同僚各位に深く感謝したい。

（所員　法学部准教授）

キャンパスでは突然に学生のゲリラ演奏が始まることも
スタンフォード・ツリーというマスコットとともに

大学中央にある教室棟の通路 古い建物も長期休暇中に念入りに手入れされている